



## GM 食品に関する誤った俗説

GM 食品について飛び交っている誤った情報の数々。ここでは、そのいくつかの例と実態をご紹介します。

### 俗説 1

**綿などの GM 作物は、食品に入っていることはない。**

#### 実態

綿の実は、油を作るために使われている。その油は主にレストランやテイクアウト店でマーガリンや調理油として使用されている。その他の例として、ポテトチップス、マヨネーズ、ドレッシングなどの製造過程にも使われている。

### 俗説 2

**動物のエサとして使われている GM 作物は安全。**

#### 実態

GM 大豆やトウモロコシなどを与えられた動物は、免疫システムの低下やアレルギー反応を示し、発育阻害や寿命が短くなったということが多くの研究結果に示されている。

### 俗説 3

**GM 原料を含む食品のラベルには、きちんと表記がされている。**

#### 実態

オーストラリアでは 2001 年 12 月以降、「Food Standards Australia New Zealand」によって、GM 作物が食品の原材料の 1% 以上使用されているもの、また GM 作物によって食品の特徴が変化したものには、「genetically modified (遺伝子組換え)」というラベル表示が義務付けられている。しかし例外として、GM 飼料を与えられた動物の肉や乳製品、高度に精製された砂糖や綿実油、チーズを発酵させるための酵素など最終的な製品に残らない少量のもの、レストランで使われる食材については表示義務がない。

### 俗説 4

**GM 作物は飢餓問題を解決するほか、農家の経営を助ける。**

#### 実態

GM 作物の収穫量はそうでないものほとんど変わらず、長期的には免疫のついた害虫を駆除するために農薬の量を更に増やさなければならなくなる。また GM 技術は気候や土地の問題、インフラや市場については言及しておらず、GM 作物は政治的、経済的な理由による食糧不足には効果がないと言われている。また、GM 作物は企業によって管理されているため、貧しい農家はその技術を使うためには多額の使用量を支払わなければならない。



## GM 作物の安全性への疑問

GM 作物は、体内に入った後の安全面に疑問が残ると言われている。以下の研究結果によると、GM 作物が認可される前の通常のテストでは GM 作物の安全性の一部分しか解明されていないとしている。



「エンドウ豆はゾウムシと呼ばれる昆虫を天敵としていたため、あるオーストラリアの科学者が、ゾウムシの消化器官を刺激して餓死させるタンパク質を発生する、赤インゲン豆の遺伝子をエンドウ豆に入れて育てた。すると、その遺伝子自体は人間には無害であったのにも関わらず、遺伝子組換えされたエンドウ豆を食べたマウスはアレルギー

ギー反応を見せた。後に、これは遺伝子組換えによって、組み込まれたタンパク質の型が微妙に変化したためと分かった」。

この研究によると、現在認可されている大豆やトウモロコシなどの GM 作物は、アレルギー性の有無を調べるのに、この研究より更に簡単なテストしか受けておらず、通過したものは安全というラベルを貼られることになっていると言う。また、この研究のように GM 作物に組み込まれた遺伝子が突然変異を起こすなど、たくさんの予測不可能な事態があるため、完全に安全性を確認できる実験方法は確立されていないとし、政府はもっと時間をかけてテストを行うべきだ、と指摘している。

取材協力：Conservation Council of WA